

『機械部契約関係書類』と国際関係経営史

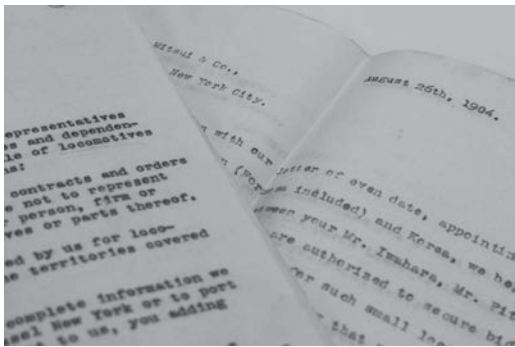
中村尚史

二〇一六年二月に上梓した拙著『海をわたる機関車』（吉川弘文館）のなかで、三井物産資料をはじめとする三井文庫所蔵史料を、たくさん使わせていただいた。中でも『支店長会議事録』は、私が鉄道用品、とくに機関車のグローバルな取引関係に注目するきっかけになった史料の一つであり、思い出深い。しかし、この史料は日本の商社史研究の根本史料であるため、多くの研究者が「私の一点」として取り上げられると思われる。そこで今回、『機械部契約関係書類』という物産資料目録でも「追加」に分類されている史料群に、敢えて注目したい。この史料群に含まれるアメリカン・ロコモティブ（ALCO）と三井物産との契約書類もまた、『海をわたる機関車』で重要な役割を果たしたからである。

三井物産は一八九六年、ニューヨーク支店を再開し、北米貿易を本格化した。その際の中心的な取扱商品の一つが、のちにALCOの中核となるスケネクタデ

イ（Schenectady）社製の蒸気機関車であった。そして一九〇一年、スケネクタデイをはじめとする機関車メーカー八社が合併してALCOが成立すると、三井物産は同社極東代理店の地位を獲得することになった。『機械部契約関係書類』中の‘Agency Contract No. 5 American Locomotive Sales Corp.’（物産二三六七―四所収）は、その交渉経緯と契約内容を示す史料群であり、一九〇四年八月の日本・朝鮮を対象とした代理店契約に関する往復書簡と、一九一六年二月の中国を対象とした代理店契約に関する契約書・書簡の二つに分かれている。このうち『海をわたる機関車』で利用したのは主に前者であり、それによって代理店契約の交渉過程を明らかにすることが出来た。一方、後者は物産の中国でのALCO製品取扱いの条件を定めており、中国政府やアメリカ人・企業、借款鉄道からの直接注文は代理店契約の対象外とされている。その詳細な分析は、一九三〇年におけるALCO代理店契約更新（物産二三六七―二四所収）の分析とともに、今後の研究課題である。『機械部契約関係書類』を用いた国際関係史研究は、まだ始まったばかりといえよう。

（東京大学社会科学研究所教授）



浮世絵研究と経済史資料

樋口一貴

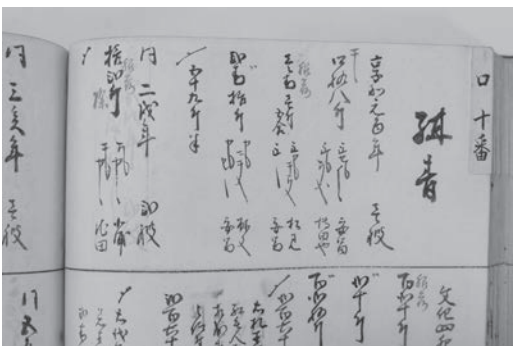
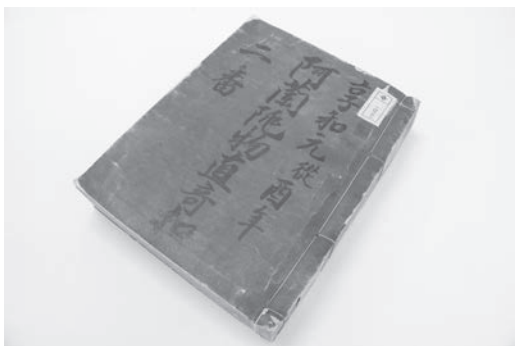
本資料は、長崎に入港したオランダ船が本方・脇荷として取引した商品名と取引量、落札額および越後屋の入札額等を記した記録である。「イ印荒物類」に九品目、「ロ印小間物類」に十一品目、「ハ印葉種類」に十九品目の計三十九品目について分類・整理されているが、本稿では「ロ印小間物類」中の「十番紺青」について述べてたい。

紺青は化学合成青色絵具であり、今日では一般的にプルシアンブルー、あるいは浮世絵研究においてはベロ藍の名で呼ばれている。ベロ藍は葛飾北斎「富嶽三十六景」や歌川広重「東海道五拾三次之内」の著名な風景版画シリーズをはじめ、幕末の浮世絵版画の基調色となっている（樋口一貴「藍摺浮世絵版画に関する一考察―葛飾北斎と溪斎英泉のベロ藍摺風景画をめぐって―」『出光美術館館報』第九〇号、一九九五年）。

この顔料が日本に輸入された記録は延享四年（一七四七）に遡れるが、当初は極めて高価であった。浮世絵版画という印刷物に使用されるようになるのは、価格が下落した文政年間末のことであり、これ以降浮世絵にベロ藍を使用した風景画ブームが起こるのである。オランダ船から輸入された紺青について、「荒種荒物寄」（杏雨書屋所蔵）をもとに年ごとに取引量と落札価格等を詳細にまとめた「紺青の落札一覧表」（石田千尋『日蘭貿易の構造と展開』六〇～六五頁、吉川弘文館、二〇〇九年）は、浮世絵の一ジャンルの流行が貿易史と密接に関連することを示している。

「阿蘭陀物直寄控」の数値はおおむね「荒種荒物寄」にも見られるものである。しかし、享和二年（一八〇二）に「脇荷」として「拾式斤」の輸入量があり一斤あたりの落札価格が「九十六匁」であったことは、「荒種荒物寄」には記載がなく「阿蘭陀物直寄控」のみに記されている。先行研究への僅かな追加であるが、プルシアンブルーの輸入に関する新知見としてここに紹介するものである。

（十文字学園女子大学／日本美術史）



越後屋の来店者数の記録

下向井紀彦

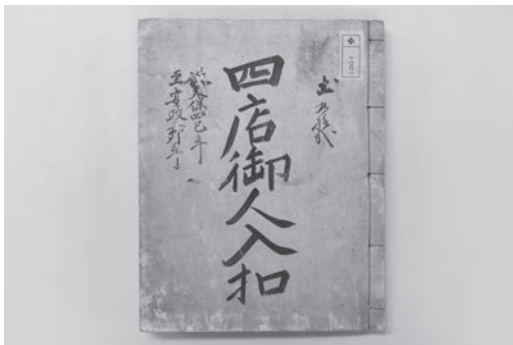
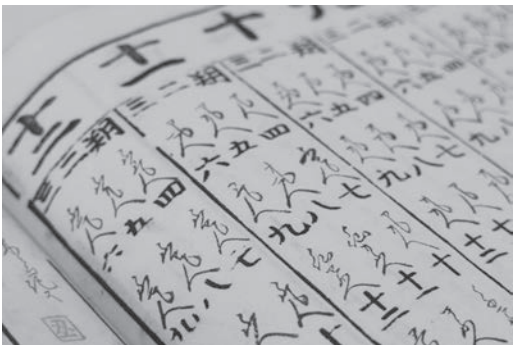
呉服店である越後屋では、近世中期以降の競合他店との競争が激しくなる中であって、自他店の来店者数を意識していた。店先売を標榜する呉服店にとって、店頭への賑わいは店の盛衰の目安になる。越後屋の京本店（呉服部門の統轄店）は、江戸と大坂の各営業店（江戸本店・向店・芝口店、大坂本店）に対して定期的に来店者数を報告させていた。また、他店との競争の激しい時期に、越後屋の各営業店と江戸・大坂の主要呉服店の来店者数を記録した史料もある。

「四店御人入控」〔本一〇〇一、以下人入控〕は天保四年（一八三三）から安政二年（一八五五）の二三年間、江戸と大坂の営業店の来店者数を、京本店で記録した冊子である。月日を入れた刷り物の集計用紙に毎日の人数を符帳で記載している。残念ながら競合他店の数値等は書かれていないが、越後屋の数字が継続的に長期間残っている点において唯一の史料である。人入控の数字を見ていくと、

長期的な来店者数の増減傾向やイベント時の数字の変化などを一見して把握できる。例えば、大坂本店の天保十一年十一月八日を見ると、それまで「サシ」〔五〇〕〜「エシ」〔七〇〕人前後で推移していた来店者が、突如「イ仙サ舟」〔一五〇〇〕人に跳ね上がっている。これは同店が大塩の乱で焼亡した店舗を再建し、見世開きを盛大に挙行了ためである。人入控はこれまであまり活用されてこなかったが、帳簿類・日記類・書状類・重役らの意見書などと組み合わせることで、人入控の数字が越後屋の経営戦略や重役の経営判断に与えた影響など、小売店としての越後屋の姿をより詳しく描き出すことができるだろう。

ただし人入控は注意すべき点がいくつかある。例えば、明和年間の調査では江戸本店内の部署別に来店者を数えており、天明年間には昼八つ時（一四〜一五時頃）に手代を競合店に送って店頭にいる人数を数えるよう定めているのだが、人入控段階の調査基準やルールは判然としない。まずそれを把握する必要がある。また、人入控に数字がなくても店の日記では開店している場合もあるらしく（論叢四〇号所収の樋口知子史料紹介）、来店者数の記載と店の営業日との突き合わせも必須である。簡単に利用できそうにみえて、扱いの難しい史料なのである。

（三井文庫研究員）





消え行く文字をのこすために

永井伴子

三井文庫所蔵の近代の会社資料中で最も利用されているのは、三井物産資料であるというのが司書としての実感です。資料複写の希望も一番多く、最初は原資料からの電子コピー、次はマイクロフィルム化が進みプリントからの電子コピー(いずれも司書がコピー)、近年は閲覧者自身によるデジタルカメラ撮影OKとなり、ここにも時代の流れが感じられます。

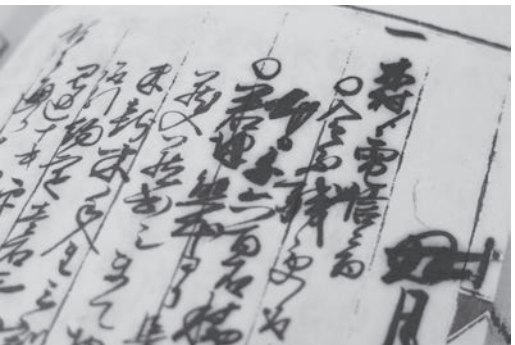
三井家記録文書中にあるものも含めて、三井物産創業期の資料は少ない中で、三井物産日記は重要な資料ですが、初期の日記には、墨で書かれた部分の他に、鉄分を多く含んだインク(三井文庫ではコピーインクと称してきました)で書かれている部分が多くあり、劣化によりインクが茶褐色化し、特に筆で書かれたらしいインクの滲みた部分は文字ごと焼け落ち、欠損、酸化などの破損の危機に瀕しているものがあります。これについては一九六八年の資料公開前から三井文庫

内でも問題とされていたようで、日記の製本を解体、裏打ちの上、再製本(外注)という処置がとられ、再製本前と後にマイクロ撮影がなされています(全四〇冊の内一五冊、明治九〜二六年分)。

私が資料保存の問題につき関心を持つようになったのは、再製本後の、この物産日記をみてからのことでした。当時ちょうど図書館界でも酸性紙劣化問題が契機となり、一九八五年資料保存委員会が日本図書館協会内に設立され、資料保存委員会月例勉強会に出席していた時期もありました。

三井文庫所蔵資料中、資料保存上では、近世の古文書類は一部虫損のひどいものもあるものの、大体において安定していると言っつてよいと思いますが、近代の資料のほうが問題は切実です。三井家記録文書中の明治期資料や、三井鉱山資料にもこのインクによる劣化はみられます。他にも蒟蒻版、青焼きなどの薄れていく文字の問題もあり、また近代―特に戦時期の資料では、紙自体の劣化や、ホチキス・クリップ等使用の錆による劣化も多くみられます。インク劣化問題については、複写物作成以外に、根本的な対策はまだまだ見いだせない状況ですが、資料保存の専門家の方から助言も受け、書庫内資料保存環境を整備し、なるべくよい状態を保てるようつとめています。

(三井文庫司書)



三井物産「日記」(物産一)